

■コラム マヤの女性にとっての複合差別

藤岡美恵子

グアテマラの地方のマヤ先住民族の村では、女性たちは朝三時、四時に起きることも珍しくない。毎度の食事に欠かせない主食のトルティージャ作りが始まり、女性たちの一日を待っているのは、食事作りや洗濯、掃除といった家事ばかりでなく、子どもの世話、畑仕事、織物や内職、市場での物売りなど絶えることのない労働である。グアテマラ北西部、メキシコとの国境にほど近いタカナ地域では、男性のみならず女性も頻繁にメキシコへ（ときに米国へも）出稼ぎ労働に行くのが当たり前ようになっていく。その地域の出身で知人のカロリーナ（現在二四歳）は、家計を助けるために小学校四年生で学校を辞めて単身メキシコに行き、数年間売り子や家事手伝いなどの出稼ぎ労働を経験した。別の一八歳の知人は、よくメキシコに子守として働きに行く。給料は一ヶ月四〇〇ペソ（約四〇米ドル）だという。

マヤの女性たちに何を抑圧あるいは差別と感じるかと問いかけると、大抵は長時間の休みなしの重労働を挙げる。しかし、女性は再生産労働だけでなく生産労働にも携わっているにもかかわらず、女性の仕事は評価されないという。女性だから価値が低いかにように扱われる、と多くの女性が感じている。たとえば、夫や父親に自分の意見を尊重してもらえず、自分のことを自分で自由に決めることができない、村の意思決定にかかわれないというの

がそうだ。また、女だからという理由で学校へ行かせてもらえなかったというのも頻繁に耳にする。夫からの暴力、性暴力、土地所有や財産相続における差別も多くの女性が指摘する。

多くの女性たちはこうした女性への抑圧を単に「伝統」あるいは「慣習」と表現するが、一方でそれを「伝統」とよぶことに異を唱える女性もいる。スペインによる植民地化以来、同化と人種主義の圧力にさらされながらも独自の文化を保ってきたマヤの人びとにとって、「伝統」は肯定すべき固有の文化とアイデンティティをも意味するからだ。たとえばマヤの女性の大部分は民族衣装を着ているが、衣装に刺繍されている図柄や色合いは各民族グループ（「マヤ」はさらに二二の言語グループに分かれ、「民族」とはその言語グループをさす）固有の文化を伝承する手段ともなっている。その民族衣装を着てレストランや学校など公共の場に立ち入るのを拒否される事件が頻発しているが、これはマヤ女性にとってアイデンティティの否定に等しい。しかし、女性たちは単に差別の「犠牲者」であるのではない。たとえば、私がかかわるマヤの共同体をベースにした教育プロジェクトでは、二〇才そこそこの若い女性リーダーが、子どもを抱え勉強する機会のない若い母親たちのために読み書き教室を作りたいと自宅の一室を開放して教室を始めた。また、マヤへの虐殺を生んだ内戦中に夫を失った女性たちが作った女性組織「コナビグア」は、いまだグアテマラの民衆運動を代表する組織の一つになっている。マヤであり、女性である——この二つのアイデンティティをともに否定されないこと、それが多くのマヤ女性が望むことだろう。